

1 はじめに

余暇活動としてスポーツを楽しむ人々が増加し、“健康ブーム”の流れに乗ってスポーツは身近なものになってきている。ヨーロッパ諸国におけるクラブ中心のスポーツ振興と異なり、日本では学校体育主導のスポーツ振興が中心である。特に部活動がスポーツ振興に果たしてきた役割は大きく、今現在でも学校における体育的活動の中核をなしていることは周知の事実である。

今の教育環境において、部活動が実施しやすい環境とは言い難い。学校の管理問題、顧問の高齢化、社会体育との関係等様々な問題を抱えている。“部活動の活性化”を学校目標にあげている学校が多い中、実情は顧問の情熱・正義感等の「やる気」で支えられており、運営面・責任問題などは顧問に負わされることが多い。学校目標と部活動の実情にギャップがあり、顧問の悩みの一つになっている現状はなかなか改善されていない。

元々、スポーツは個人の内発的な動機によって行われるものであり、与えられるものではない。戦後、軍事教育の一貫として体育が利用され、学校での体育は人間教育の手段として行われてきた。このことは決して悪いことではなく、日本独自のスポーツ文化を作り上げてきたと考えられる。

しかし、これからは、「スポーツで教える」ではなく「スポーツを教える。スポーツを楽しむ」ということが大切であり、学校体育・部活動がこのような観点からどのように関わられるかが重要である。学校・教員の関わり方を根本から見直していくことを考え、様々な実践をしてきた。今回はその報告とさせていただきたい。

2 スポーツ文化の歴史

日本のスポーツ発展は、学校体育が先導してきた。元々は軍事教育の一環として実施され、戦争を勝ち抜くために、強固な精神と身体をつくることを目的として体育が実施された。スポーツ振興法をベースにした様々なスポーツ事業が展開されたが、文部省（現在の文部科学省）の直轄組織ということで法的な拘束が強く、多様化したスポーツの現状に無理が生じてきている。「スポーツ宣言日本」にもあるように、スポーツの本質的な部分（スポーツは、運動の喜びを分かち合い、感動を共有し、人々のつながりを深める。人と人との絆を培うこのスポーツの力は、共に地域に生きる喜びを広げ、地域社会を豊かで味わい深いものにする・・・）を追求した政策作りを目指し、スポーツ省の設置なども検討されたが、実現できていない。

2011年スポーツ基本法が制定され、スポーツ立国戦略として、①人（する人・観る人・支える人）の重視②連携・協働の推進 を掲げ、様々な事業が展開され始めてきている。

比較対象として、スポーツ先進国ドイツを例に挙げてみる。ドイツは国民の運動不足解消のため、まずスポーツ施設の拡充を始めた。有名な「ゴールデンプラン（1950年～60年）」である。シュポルトフェラインと呼ばれる地域スポーツクラブが数多く作られ、地域の人々が集まる場としてスポーツが発展した。1960年代に入り、「第2の道」という政策のもと、地域スポーツクラブ中心の多種目プログラムが作成され、日常のスポーツを第一に考えたプログラムが数多く作られた。有名なトリム運動はこのひとつである。地方分権が進んでいたドイツでは地域独自のスポーツ振興が進められた。学校では体育的活動は授業で行わず、体育的活動は地域スポーツクラブが実施している。民間企業とも連携し、公共施設にも多くの地域企業が貢献している。地域の実情に合ったスポーツ活動の支援が、様々な方面から実施されている。逆に、学校体育の在り方なども検討されているようである。

3 日本のスポーツ振興における部活動の意義と現状

部活動は学校教育の中で、大きな役割を果たしてきた。スポーツ振興という面では、競技力の向上・スポーツの普及・・・教育という面では生活指導・人間教育・・・地域の活性化まで担っている活動もある。素晴らしい功績である。

しかしこれらの活動は、教員のボランティアに支えられてきた。土日もなく平日も夜遅くまで、保障も手当もない中、責任だけを負わされて活動している状況が当たり前になってきている。公務も年々増加し

ている中、部活動に充てる時間が削られ、その中でのやりくりもきつい状況である。教員も、何人分もの仕事をこなしつつ、生徒にできるだけいい経験をさせてあげようと、家庭までも犠牲にして運営されているのが現状ではないかと思う。

学校も不景気のあおりを受け、予算が足りず部活動にまわす資金が不足してきている。県の指導の下公共性を重視するあまり融通がきかないことが多く、活動が充分にできない実情もある。他団体が学校施設を使用することにも多くの制約があり、民間の企業が協力することも禁止されている。世間的には、部活動の活性化を掲げている学校が多いが、活性化というよりは、学校としての責任を問われないような組織の体裁を整えているだけにとられてもおかしくない現状がある。

さらに、少子化の影響による各競技団体の実情も厳しい。学校の部活動で活性化を図ることが競技存続のポイントになっている競技も少なくない。競技人口の多い競技でも多くの事業を実施していくにあたって 予算不足になっており、学校の施設利用をすることが効率よい事業を展開するための条件にもなっている。

4 ドイツの良さを取り入れたこれからの日本のスポーツ振興の可能性は？

学校の施設を効率よく利用できる地域主体のシステムづくりと、教員だけが部活動に関わるのではなく、多くの人が（特に地域の人々が）「おらが町の学校」に関われる組織作りが大切である。ドイツのシュポルトフェラインを学校に、学校の部活動を地域主導のクラブに、これがすべての問題を解決できる方法であると考えた。

① 学校の施設を利用した地域主導のスポーツ活動

→学校には多くの施設がいっぱい

→学校には専門家がいっぱい

→学校はどの町にもある

② 多くの人と関わりを持ちながら推進できる部活動

→教員だけではなく、多くのスポーツ指導者とのかかわりの中での活動

・・・社会性を身に着けるには一人ではなく、多くの人の関わりが大切

→地域の様々な団体に関われる・協力できる部活動

→地域主体のシステムづくり

③ 子供の成長に多くの人に関われるコミュニティづくり

→教育は地域環境が大切

・・・昔の日本・人の関わり

→世代を超えた交流が真の人間教育

→地域の輪・和がこれからの日本を支える。

5 だからNPO・・・

NPOとは、特定非営利活動促進法（民法34条の特別法）に基づいて、特定非営利活動を行うことを主たる目的として、設立された法人

→営利目的ではない

→情報を市民に公開することが義務

→17分野の活動での増進、寄与が目的

NPO法人は、利益追求を目指さず、公益的な社会貢献としての活動分野（17分野）内の活動を主とした運営をしていく法人であり、常に情報公開をしながら活動をしていくことに特徴がある。

法人ということで、組織的には一つの会社と同じである。

公益性を持つということで我々が目指している地域貢献活動・学校の課外活動へのサポートという目的においてはNPO法人が適していると考えられる。また法人格を持つことによって資金の調達が容易になり、効率よく事業が展開できるようになった。特にスタッフへの給与が工面できることは大きい。また、地域の企業からのサポートも受けやすくなり活動自体の幅も広がってきている。

また、NPO法人には以下のメリットがある。

- ① 団体名で様々な契約行為が可能になる。
⇒物品の購入・口座の開設・契約等も団体で・・・
- ② 事業を行う際の資金調達がスムーズになる
⇒国や地方公共団体、公的金融機関がNPO支援に取り組んでおり、融資を受けやすい。
寄付金に関しては税制上の優遇措置があるため、寄付が受けやすい
- ③ 給与を払える。
⇒活動をしてくれた方に報酬を払える。（もちろん教員はだめ）厚生年金や健康保険、雇用保険にも加入できる。
- ④ 社会的信用が高まる。
⇒国の認証を受けたNPO法人ということで高い信用のもと活動ができる。

逆にデメリットは

- ① 活動内容は、申告した定款をもとに活動
⇒任意団体のように思いついたらすぐに違う事業を展開することはできない。定款に定めた事業内容を変更するには総会での議決と所轄庁の認証が必要である。
- ② 会社法人に比べて、設立に時間がかかる
⇒通常会社は1か月で設立できるが、NPOは早くても4か月かかる。
- ③ 県への報告事項が多い
⇒税の申告義務・事業報告等、公共性を維持するための報告事項が多い。

6 なぜ我々がNPO法人を設立したのか？

- ① 部活動活性化のために
 - ・幕張総合サッカー部の実情 部員 160名 指導できる教員 1人
グラウンドは常にサッカーコート1面使用可能
→生徒は公式戦に出られない。
→指導できるスタッフが足りない。

<解決方法>

- ・サッカークラブの設立（FC MAKUHARI）・・・現在40名（外部4名）
→運営はNPO 幕総クラブ
 - ・指導者派遣（現在4名）
→派遣はNPO 幕総クラブ
→地域サッカークラブ（NPO）からの指導者派遣（5名）
- ② 地域に根差した活動
幕張新都心<打瀬地区>
 - ・新しい街→人と人とのつながりがまだまだ少ない。

幕張新都心勤務の方々が街に愛着を感じていない。

→人と人を結びつける役割をする組織・団体が少ない。

→幕張総合高校生徒がもっと社会性を持った人になってほしい。

→この社会性を持つことが、人間性の向上につながる。

<解決方法>

- ・NPO幕総クラブ主催のサッカースクール実施・・高校生も参加
- ・ベイタウン商店街とのつながり
 - お祭り・各種イベントの参加（NPO幕総クラブとして参加）
- ・地域活性団体との連携
 - ・賑わい作り研究会・オービックシーガルス（アメフト）
 - ・スポーツ&アートリーグ 他
 - NPO幕総クラブとしてスポーツイベントの実施。
 - *高校生も参加

7、活動実践例

① FC MAKUHARI

平成23年ユースクラブチームの発足。クラブユース大会。千葉県高校サッカーリーグに出場。現在40名のメンバー。平成24年度は社会人チームを発足。千葉県社会人リーグに出場。現在23名のメンバー。

② 少年サッカースクール

月の第2土曜日 15:00～実施。打瀬地区のこども達を中心に、地域クラブチームの参加。大人の方々も多く参加している。

③ 千葉市指導者講習会事務局運営

月の第2土曜日に実施。参加者の募集・運営を担当。

④ 地域イベントへの参加

・ベイタウン祭り

打瀬地区で行われるお祭りである。スポーツ部門のイベントとして、キックターゲット。サッカーボウリングなどを実施。

・ベイタウンスポーツフェスタ

打瀬のスポーツ公園で行われるスポーツイベントに参加。アメフトのオービックシーガルスや、野球の千葉ロッテ。プロバスケットチームの千葉ジェッツ。クリケット協会とも協力をして実施。

・ベイタウン朝市

2ヶ月に1回行われる朝市。少年サッカー教室。イベントサポートの実施。

・千葉市花火大会への出店

スポーツコーナーの実施。（キックターゲット・ストライクアウト・射的 等）

<その他> オービックシーガルス公式戦外周イベント参加。

ブラインドサッカーの実施。

千葉大学でのスポーツイベント・サッカー部門運営 等

8 活動の成果

<FC MAKUHARI>

選手にやりたいチームを選ばせ（高体連か？クラブか？）、目標を持ってサッカーに取り組ませることにより、前向きにトレーニングに励んでいる。新2年生のメンバーの3分の2がクラブ登録をし、千葉県ではJEF・レイソルに次ぐ成績である。（3年生を相手に）関東大会でも上位の成績を残すことができた。外部からも興味を持ってクラブに入ってくる選手も出てきた。在学していなくてもチームに入れることがクラブの良さであり、地域のクラブとして発展していくことが理想の姿だと考える。指導者の数も増え、報酬を受け取りながら責任をもって指導にあたって下さっている。生徒にとっても色々なタイプの指導者がいることによって多くの相談相手ができ、集団の活性化につながっている。今年、FC MAKUHARIの社会人チームも結成された。OBが中心ではあるが、クラブの大会では高校生も入って参加できる。公式戦での多世代メンバーのサッカーにより、高校生のレベルアップも図れるようになってきた。

高体連のチームも関東プリンスリーグに昇格した。（今は降格中であるが・・・）様々なカテゴリーの選手が上達をし、成果を出し始めている。グラウンドに目標を持ちトレーニングに取り組む選手が増えたことが、良い結果につながっていると考えている。

<地域行事への参加>

卒業したOBが様々な行事に参加することによって、より多くの方々の協力が得られるようになってきている。OBは大学生がほとんどであるが、地域の方々と心のふれあいが癒しの場になっているようである。お祭りやスポーツイベントでは、高校生も参加している。必然的に子供からお年寄りまで様々な世代の方々と関わりを持つことになり、世代を超えた関わりが、いい経験になっている。与えられることをこなすだけの生活をしている高校生にとって、様々な価値観の違った人々との関わりから生まれる自発的な活動は、人間力の向上と、コミュニケーションスポーツであるサッカーのレベルアップにもつながると考えている。

<戦 績>

{FC MAKUHARI 戦績}

平成23年度

日本クラブユースサッカー選手権U18 関東1次予選 1次予選敗退
千葉県サッカーリーグU18（4部リーグ）優勝 次年度3部リーグへ昇格！！
千葉市ユースサッカー選手権大会 優勝
KCYリーグ 2次予選進出 2次予選敗退
千葉県クラブユース新人戦 3位

平成24年度

日本クラブユースサッカー選手権U18 関東1次予選 1次予選敗退
KCYリーグ 2次予選進出

{幕張総合高校サッカー部戦績}

平成19年度 千葉県高校サッカーリーグ1部A4位
平成20年度 千葉県高校サッカーリーグ1部A3位
平成21年度 千葉県高校サッカーリーグ優勝・・・NPO 幕総クラブ発足
関東プリンスリーグ参入戦→昇格
平成22年度 関東プリンスリーグ2部 7位（リーグ残留）
全国高等学校総合体育大会 千葉県予選3位
平成23年度 関東プリンスリーグ2部A 7位（県リーグ降格）・・・FC MAKUHARI ユース発足

平成24年度 千葉県高等学校新人大会 Dブロック優勝・・・FC MAKUHARI トップ 発足
高円宮杯千葉県高校サッカーリーグ 千葉県1部 優勝
プリンスリーグ参入戦に参加

9 今後の展望

高校生が生き生きと目標を持って部活動に参加できる環境づくりをすることが、我々の一番大切な仕事である。しかし、学校教育のおかれた立場は難しく、部活動の存続自体も議論されるような時代になってきている。学校も元をただせば地域の方々の税金で作られたものである。もっと学校がオープンになり、規約・組織を整えながら、地域住民・地域企業・商店街 等と実質的な交流ができるようになることが理想だと考える。

NPOをソフト面の切り札として、ハード面は日本の学校文化を継承して活用していくことが今後のスポーツ発展・部活動の発展につながっていくと考える。部活動も多くの人たちが関われる組織をつくり、一顧問の価値観だけで運営される部活動から脱却し、多くの人々が関われる部活動の構築が更なる発展につながる。“部活動のクラブ化”が今後の部活動活性化のための方法であると思う。

教員の質の向上問題・不祥事問題・サービス問題・いじめ問題など 現代の教育では、様々な問題が起きている。人の問題は人にしか改善できない。もっと本当に開かれた学校現場をつくり、多くの方々との連携が日常になってくれば改善できることもあるのではないかと・・・

部活動の発展のために今後とも尽力していきたい・・・

<参 考>

NPO法人設立教室（上手なNPO法人の作り方）www.e-jimusyo.net/npo/kiso/n05.htm